

情報処理学会平成2年度功績賞



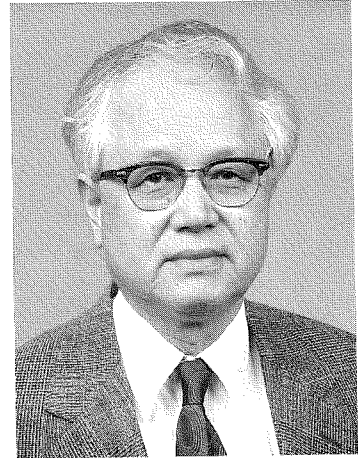
西野博二君
(大正13年3月21日生)

西野博二君は 永年にわたってコンピュータの研究開発に携わり、ETL-MARK VIの完成に情熱を傾けられ、この分野における先導的役割を果たされました。

また先端的情報処理として国の内外から注目された大型プロジェクト「パターン情報処理システム」のプロジェクトリーダーとして活躍されました。この成果は、その後の人工知能研究の萌芽となり、情報化社会の展開に重要な役割を演じることになりました。

一方教育の分野においても、筑波大学・東京工科大学教授として、計算機工学や情報工学分野における後進の育成と指導にあたられました。

さらに長期にわたり SCI をはじめとして、情報処理分野における標準の確立に尽力されるとともに、本学会の理事等を歴任され、学会の発展に多大の功績を残されるなど、情報処理における学問と教育の発展に尽くされた功績はまことに顕著なものがあります。



室賀三郎君
(大正14年3月15日生)

室賀三郎君は 通信理論、情報処理の広範な分野で多くの世界的研究業績を挙げられ、また日米の技術および学術の交流にも多大の貢献をされました。

世界最初のパラメロンコンピュータ MUSA-SINO-1号を開発されたほか、しきい値論理、論理回路合成、LSI-CAD等の研究でも世界的な業績を挙げられました。

教育者としては米国イリノイ大学教授として情報工学、情報処理の分野で多くの後進を育成されました。また日本からの多くの留学生、訪問者を労を厭わず世話され日米の技術および学術の交流の促進に尽力されました。

また米国コンピュータの技術や業界の動向等をきめ細かく日本に紹介され日本のコンピュータ産業に貢献されました。

本学会創立以来海外から本学会の活動を支援され、情報処理の学問と教育の発展、さらに日米交流に尽くされた功績はまことに顕著なものがあります。



後藤英一君

(昭和6年1月26日生)

後藤英一君は 計算機科学および物理学等の広範な分野で数多くの世界的な研究業績を挙げられ、学術論文や特許等を通じて学問や技術の発展に指導的な役割を果たされました。

学生時代に発明された、磁気コアと線輪で構成された回路のパラメータ励振現象を利用した日本独自のパラメトロン論理演算素子を用いて開発された PC-1, PC-2 計算機は、当時の学術研究のみならず産業界にも多大の影響を与えました。そのほか紫綬褒賞の授賞対象となった可変面積型電子ビーム投射法の着想にもとづく電子ビーム露光装置の研究開発、最近の磁束量子パラメトロン素子に関する研究開発等は多大な功績のごく一部です。

さらに本学会の理事、IFIP 副会長を始め学術審議会専門委員、情報処理振興審議会専門委員等国内外にわたり学会の発展に多大の貢献をされるとともに、東京大学教授として多くの優秀な後継者の育成に尽くされた功績はまことに顕著なものがあります。